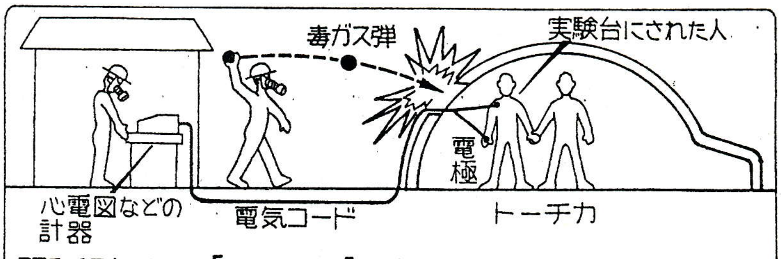
ゆうかん　トピック

戦慄の人体実験

暴かれた旧陸軍の"アウシュビッツ"

太平洋戦争の開戦から十二月八日で丸四十年。この大戦中、旧日本軍が中国大陸で行った人体実験のせい惨な実態が、ようやく秘密部隊出身者の口から語られ始めた。細菌戦の「満州七三一部隊」（石井部隊）と、毒ガス戦の「満州五一六部隊」。秘密のベールの奥で、「兵器開発」や「研究」に名を借りて続けられた戦慄（りつ）すべき実験の数々。三千人以上といわれる犠牲者は、だれ一人、生きては帰らなかった。死体の痕跡すら、とどめなかった。だからこそ、証拠の被害者の告発を免れてきた日本人の歴史の一頁。戦時下とはいえ、捕虜、囚人とはいえ、生きた人間を死の実験台にさらし、もだえ苦しむ様を冷静に観察できる心とは何か。ナチスのアウシュビッツに劣らぬこの残虐の「事実」は、パールハーバー四十年を前に盛んな戦争回顧論議に、衝撃を与えずにはおかないだろう。（社会部、朝野富三、宇野晴久）


毒ガス弾
実験台にされた人
電極
心電図などの計器
電気コード
トーチカ

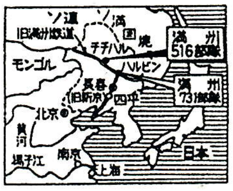
昭和17年4月の「731部隊」と「516部隊」合同の毒ガス人体実験はこうして行われた（出身者の証言をもとにしたもの）

四十年の歳月が、警戒心を薄れさせたのか、あるいは年老いて、今、言い残しておかねば、の気持ちからか、これまで秘してしゃべらないとされてきた両部隊出身の幾人かが、毎日新聞記者に語った。いずれも匿名扱いが条件ながら、この人々が、今さら、作り事を言う必要はなく、証言は真実を物語る歴史的証拠といえよう。そのうち三人の目撃した三つの実験のケースを紹介する。

＜実験①＞　証言者＝兵庫県在住、医学研究所長、A氏（六七）。七三一部隊出身、元薬剤少佐。

昭和十七年四月、七三一と五一六両部隊が、ソ満国境近くの都市、ハイラル郊外の草原で三日間、合同実験をした。「丸太」と呼ばれた囚人約百人が使われ、四つのトーチカに一回二、三人ずつが入れられた。防毒マスクの将校が、液体青酸をびんに詰めた「茶びん」と呼ぶ毒ガス弾をトーチカ内に投げ、窒息性ガスのホスゲンをボンベから放射した。「丸太」にはあらかじめ、心臓の動きや脈拍を見るため体にコードをつけ、約五〇㍍離れた机の上に置いた心電図の計器などで「死に至る体の変化」を記録した。死が確認されると将校たちは、毒ガス残留を調べる試験紙を手にトーチカに近づき、死体を引きずり出した。一回の実験で死ななかった者には、もう一回実験を繰り返し、全員を殺した。死体はすべて、近くに張ったテントの中で解剖した。

「丸太」の中に六十八歳の中国人の男性がいた。この人は七三一部隊内でペスト菌を注射されたが、死ななかったので毒ガス実験に連れて来られた。ホスゲンを浴びせても死なず、ある軍医が血管に空気を注射した。すぐに死ぬと思われたが、死なないのでかなり太い注射器でさらに空気を入れた。それでも生き続け、最後は木に首をつって、殺した。この人の死体を解剖すると、内臓が若者のようだったので軍医たちが驚きの声をあげたのを覚えている。



＜実験②＞　証言者＝A氏。

昭和十七年、佐官級の陸軍技師〇〇（A氏は実名を挙げた）は、七三一部隊で凍傷予防を研究していた。当時、部隊の監獄に白系ロシアの婦人五人がいた。その技師は箱状の冷凍装置の中に婦人たちの手を突っ込ませ、マイナス一〇度から同七〇度まで順々に温度を下げ、凍傷になっていく状況を調べた。婦人たちの手は肉が落ち、骨が見えた。婦人の一人は監獄内で子供を産んだが、その子もこの実験に使われた。その後、しばらくして監獄をのぞいたが、五人の婦人と子供の姿は見えなくなっていた。死んだのだと思う。

＜実験③＞　証言者＝神奈川県在住、国立大学名誉教授、B氏（六七）。五一六部隊出身、元技術少佐。

昭和十八年ごろ、ハルビンの東にあった七三一部隊の実験場で毒ガス実験に立ち会った。三㍍四方、高さ約二㍍のガラス張りのガス室の中で、中国人の男性一人が目隠しされ、クイに後ろ手に縛られていた。ガス室内では、くしゃみガス（嘔吐性ガス）がもうもうと煙を上げ、男の人は激しくせき込み、苦しそうにもがいていた。周囲で七三一、五一六両部隊の軍医や技術将校十数人が見ていた。自分はいたたまれず十分間ぐらい見ただけで、その場を離れた。男性のその後は知らない。ここでは糜爛（びらん）性ガスのイペリットでも実験しているのだと聞かされた。

毒ガス、細菌戦　3千人超す犠牲者

秘密部隊出身者の多くは責任追及免れエリートの道

もちろん、しゃべらない人の方がはるかに多い。取材を申し込んでも、「人違いだ」とウソを言い張る元軍医。「ダメだ。その話だったらしないぞ」と玄関払いする元大佐。部隊にいたことを家族にすら話しておらず「家では具合が悪いから」と外で渋々インタビューに応じた元技術中尉もいた。

七三一部隊は戦後、ソ連側のハバロフスク軍事裁判で追及されたが、被告人席に座ったのは十二人だけ。いち早く引き揚げた石井中将をはじめ、ほとんどが戦後も責任を問われることなく、それどころか、その多くは大学の学長、教授、大会社の幹部などと、エリートの道を歩んだ。明らかに人体実験で得たデータをもとにした論文で、戦後、博士号をとった元軍医もいる。

凍傷実験でA氏に名指しされた元陸軍技師は戦後、公立医大の学長を務め、生存者叙勲も受けている。証言をつきつけると、彼は言った。「人体実験？部下が勝手にやったかもしれんが、僕はやってない。それより君ィ、考え違いをしているよ。仮にそうだとしても、だ、戦争だったんだよ。命令を下したのは国だ。すべて国の責任で、個人は関係ないよ」

ちなみにアウシュビッツなど強制収容所で人体実験や大量虐殺にかかわったナチス戦犯について、西ドイツ政府は戦後三回にわたって刑法を改正、時効を廃止した。今なお同国の検察当局は犯罪者の捜索を続けている。

源流は軍医学校

人体実験

細菌戦の七三一部隊を作ったのは石井四郎軍医中将（昭和三十四年死亡）。昭和五年、ヨーロッパ視察から帰国後、細菌戦の準備を陸軍首脳部に進言。これがいれられ同七年、陸軍軍医学校（東京・戸山ケ原）に防疫研究室が、旧満州（中国東北部）のハルビン近くに「東郷部隊」という暗号名の細菌研究所が作られた。部隊長は石井中将で、七三一部隊の前身といえる。陸軍の人体実験はこの時から始まったようで、当時、関東軍作戦主任参謀だった遠藤三郎元中将（八八）＝埼玉県狭山市＝は「このころ、実験は細菌だけでなく、水だけとか、何も食べ物を与えないで何日生きられるか、なども調べていた」と証言する。遠藤氏によると、死体は高圧の電気炉で痕跡の残らないように焼却していたという。

毒ガス研究は、第一次大戦時にヨーロッパで使用されたのに刺激され、大正七年、軍医学校に化学兵器研究室が作られてスタート。同年のシベリア出兵には早くも防毒マスク二万個を戦地に送っている。昭和八年、満州の四平の実験場で、高圧電流や毒ガスを使って人体実験をしているが、この時の部隊長も軍医学校派遣の軍医中佐。人体実験は軍医学校を源流にしている。

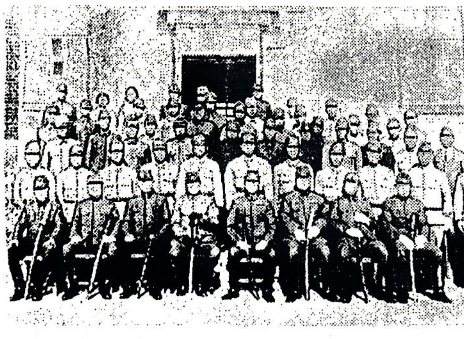
「東郷部隊」は十一年に「関東軍防疫給水部」、毒ガス戦部隊も十四年に「関東軍化学部」の名で正式発足。両部隊は合同で人体実験を行った。

七三一部隊

表向きは伝染病予防や飲料水の供給のための部隊だが、実際は細菌戦を研究。ハルビン郊外の平房に本部を置き、各地に支部が作られた。隊員は約三千人。ペスト菌を持ったノミを詰めた細菌爆弾を開発したほか、現在、中国、韓国の民間人、日本の医科系大学研究者間などで発生している流行性出血熱も人体実験で研究していた。

五一六部隊

チチハル郊外にあり、技術将校を中心に毒ガス兵器の開発にあたった。致死性の高い青酸ガス兵器開発に特に力を入れ、この実戦部隊として近くに「満州五一六部隊」など関東軍化学部練習隊もあった。「七三一部隊」のかげに隠れた形で、戦後、部隊の存在すら明るみに出なかった。



「満州516部隊」の本部は、赤レンガ造りだった――写真は昭和17年、同本部前でのある部隊の軍人、軍属たちの記念撮影

「丸太」と呼ばれた被実験者

生きたまま実験に使われた人たちは「丸太」と呼ばれた。中国人とソ連人が主で、そのほとんどは思想犯や反日運動活動家。関東軍は正式には「特移扱」と称し、中国人は憲兵隊が、ソ連人は陸軍特務機関が捕まえ、簡単な取り調べだけで裁判にもかけず、七三一部隊内の監獄に送り込んだ。一度入った者は二度と出ることはなかった。「丸太」という名は実験材料に人間を使っていることを隠すためとみられる。七三一部隊はしばしば憲兵隊に「材料数本、送れ」と要請。その数はハバロフスク軍事裁判（二十四年）で明らかになっただけでも年間五、六百人。昭和十五年から終戦までに三千人以上とみられる。終戦直前の部隊撤退時には、建物の破壊とともに、残っていた「丸太」を青酸カリを盛った食事やけん銃で殺し、すべてをヤミに葬ったという。